

## 境界

私は、小さい時からピストルをおもちゃに買ってもらったことがありませんでした。代わりにいつも遊んでいたのは電車や車のおもちゃでした。

今、父親になって、同じ様に子供達に電車をあたえ、自然環境について語り、野山で遊び、美しい花の絵を描いています。私も祖父母、両親も、この何十年のあいだに繰り返された、闘争と戦争の記憶をわかりやすく小さな子供に伝えることよりも、殺りくの直接的道具「武器」を遠ざけることにしたのでしょう。

ここで使っている機関車は、満州鉄道であり、西部開拓時代にアメリカインディアンが襲ったといわれている機関車です。機関車は、文化、文明の象徴だったと同時に、侵略の道具でもあったのです。

国家という権力をもった集団は、文化、文明の繁栄の名のもとに、豊かな自然と共に暮らしてきた先住民から聖地を奪い取るため、重労働を課し、まず線路をひきました。そして、貨車には、武器、弾薬、兵士を満載して機関車を走らせ、境界線をひいていったのです。

二階の部屋は、女中さんの部屋でした。

この部屋の仕組は、彼女が目にした八十年前から今もあまり変わる事のない「外の風景」を、もうすぐ取り壊される旧谷口医院の「内部」に記録しつづけています。

昼間でも薄暗い勝手口から、すでに壊されている台所には、空間の中に鉄板と鉄鋼材を設置しました。

私は、この装置で、大正、昭和、平成と歴史的に激動の時代に、淡々と食事を作り、男達を「外の世界」へ送出した「家の人達」が無意識に引いていた心の中の境界を表現しています。

1997年 4月25日 息子、六才の誕生日。祖母の命日。

吉川 恭生